

消費活動と政治：

女性自由連盟（Women's Freedom League）の戦略

佐藤 繭 香

はじめに

20世紀始めのイギリス女性参政権運動においては、エメリン・パンクハースト夫人(1858-1928)率いる女性社会政治同盟（以下、WSPU）と穏健派の女性参政権協会全国同盟（以下、NUWSS）のふたつの組織の名が良く知られている。一方で、WSPUから1907年に分離した女性自由連盟（以下、WFL）は、第二次世界大戦後まで続いたにも関わらず、知名度が低い。少なくとも、1974年にイギリスの公共放送BBCが制作したドラマ「協力して」^{ナショナル・ユニオン・オブ・ウイメンズ・サフリッジ・ソサイエティーズ}によって、WSPUの活動が目ざされると、研究においてもWSPUの活動、特に戦闘的行為^{ミリタンス}に焦点があてられてきた。その後、1990年代に、WSPUとNUWSSの二項対立的な女性参政権運動史の叙述が批判されるようになり、他の小規模な組織の活動にも焦点が当たるようになるなか、歴史家C. ユースタンスによってWFLの研究が本格的に始まった¹。しかしながら、特にWFLの地方支部の活動については、まだ今後の研究が待たれる。

このように多様に存在した女性参政権運動組織の活動を明らかにしようとす一方、ミリタンスやロビー活動に限らず、女性参政権運動における文化的な活動も注目されるようになった。それは、イギリス女性参政権運動が当時のイギリス社会に大きな影響を与えていたことを再考するためでもあった。歴史家J. マーサーは、WSPU、NUWSS、そしてWFLの消費活動に着

目し、特にこの3つの女性参政権組織が発行した機関紙と組織の様々な商品を販売する店舗に焦点をあてた。女性たちを消費者とみなし、女性参政権運動が消費者たる女性をどのように運動に組み込もうとしたのかに注目したのである²。

WSPUと同様に戦術的な手段をとるWFLは、社会に流布する女性らしくない女性参政権活動家のイメージを払拭するために、一般的な女性が求める娯楽に目を向けた。WFLにとって、買い物という娯楽を提供するバザーは、WFLが決して当時の伝統的な女性観に反してはいなかったことを示す絶好の機会となっていた。

1909年4月にWFLによって開催された「緑、白、黄金祭」で、ヴィクトリア時代およびエドワード朝時代の女優エレン・テリー (1847-1928) と並び、ちょうどこの頃イギリスを訪れていたオーストラリアの画家ローソン・バルフォアの妻は、9世紀に生きたイングランド七王国ウェセックスのアルフレッド大王の母に仮装し、オーストラリア生まれの女優ミス・ミュリエル・メタース (1877-1969) は、ジャンヌ・ダルクに仮装した³。ここでは、アルフレッド大王という立派な息子を育てあげた母と聖なる戦乙女ジャンヌ・ダルクが並列されていた。WFLのバザーにおいて特徴的だったのは、母や妻といった伝統的な女性とサフラジエットのようにならぬ女性からの逸脱した戦う女性とを相反することなく、女性の側面をあらわすものとして提示したことであった。この特徴は、WFLのバザーにおける装飾、販売する商品、提供した芝居などの演目、展示内容にも一貫して見られる。本稿では、WFLが、女性の娯楽である消費活動の場であるバザーをいかにして組織のイメージを向上させる政治的なプロパガンダの場として利用したかを考察する。

1. 女性自由連盟 (WFL) とバザー

『オックスフォード英語辞典』には、バザーとは「東洋のバザーを模倣したもの; 特に、何らかの慈善的、宗教的な目的のための使用しやすく装飾的な品々の販売をさす。また、たくさんの種類の小間物をディスプレイする店舗、店舗が並ぶアーケードのこと」と記されている。この言葉は、ロマン派の詩人ロバート・サウジー (1774-1843) の『イングランドからの手紙』に始めて使用され⁴、19世紀半ばになると、反穀物法運動では資金集め的手段と

して女性たちがバザーを行うようになるなど慈善や宗教的な目的だけでなく、政治的な目的のための資金調達手段としてもバザーは使用されるようになっていた。その後、デパートなどが、特別なセールを行うときに、「バザー」という名称を冠するようになっており、消費文化の発展を象徴するものでもあった。

「見えない大衆」を意識し、彼らを運動に取り込もうとしていた女性参政権組織にとって、中流階級女性を引き付けるには、政治的な目的のための資金集めと買い物という女性の娯楽が組み合わさったバザーは、非常に有用なプロパガンダの場であった。女性参政権運動においては、早くも、1871年にマンチェスタ協会がバザーを行っている⁵。実際、WFLを含め、WSPU、NUWSSをはじめとした数多くの女性参政権組織がこのバザーという形態を活用していた⁶。

1908年3月31日と4月1日の両日、WFLは「グレイト・サフリッジ・バザー」を開催した⁷。バザーという名を冠したこのイベントは、モノの売買だけでなく、芝居などの娯楽の提供に加え、展示という3つの機能を備えていた。WFLのバザーは、その後、バザーではなく、フェスティバルという名称を使用するようになるが、その内容に大きな変化はなく、バザーを訪れた人が、買い物を楽しみ、芝居や展示を見て楽しむと同時に女性参政権運動に触れる場であった。

モノの売買だけでなく、モノの「展示」は、大衆的な娯楽のひとつであった。1908年には、デイリー・メール社による「理想の住まい展覧会」、さらには英仏博覧会などが行われ、世界で最初の万国博覧会が開催された1851年ではなく、1908年こそが「博覧会の年」とであると大衆紙『デイリー・メール』が宣言するほど博覧会というイベントが目白押しであった⁸。その年に、WFLも始めての「グレイト・サフリッジ・バザー」を開催し、そこに展示を取り入れ、時代のニーズに的確に対応した。

WFLは、1908年春の「グレイト・サフリッジ・バザー」を開催した後、翌1909年4月には、「^{グリーン・ホワイト・アンド・ゴールド}緑、白、黄金祭」をウェストミンスター地区のキャクストン・ホールで行い、同年12月には、ロイヤル・アルバート・ホールにて、「^{ユール・タイド}クリスマス祭」を開催、1910年10月には、「組織間のサフリッジ祭」に参加⁹、その後、1912年11月13日から16日にロンドンのキングス・ロードにあったチェルシー・タウン・ホールにて「国際サフリッジ祭」

を開催したという記録がある¹⁰。

消費活動を利用したプロパガンダには、WSPU がバザーだけでなく、店舗を構えるなど、特に力をいれていた¹¹。歴史家マーサーによると、WSPU はミリタンシーが著しく激化する 1912 年までは、プロパガンダを目的とした商品を積極的に販売したが、その後、消費活動への力の入れ方が弱まっていった。一方で、WFL は、反対にその間も商品を通じたプロパガンダに力を入れていったという¹²。WFL のバザーの装飾、商品の種類、多種の娯楽の準備などにおいては、初期の頃も決して WSPU に劣ってはいなかった。

著述家としても有名なレディ・グローヴ（1863 - 1926）が「グレイト・サフリッジ・バザー」のオープニングに登場した。WFL は年次報告書において、「ドラマチックなエンターテイメント、仮装劇、スピーチや装飾的なフェアは、大衆に参政権活動における多面的な側面を見せた」と報告した¹³。ミリタンシーだけが目立ちがちな参政権活動の多面性を示す場であり、同時に、WFL にとってバザーは資金集めの手段であった。1908 年の現金勘定によると、収入の約 17 パーセントをバザーでの収益が占めている¹⁴。1912 年の「国際サフリッジ祭」は、金銭的には大成功をおさめ、357 ポンドの利益をあげた¹⁵。こうしたバザーでは、バザーへの入場料に加え、ある特定の部屋、たとえば芝居を上演している部屋などへの入場料も課せられた。

「緑、白、黄金祭」への入場料は、1 シリング、夕方 6 時以降は 6 ペンスである。1910 年の日英博覧会の入場料は大人が 1 ポンド 1 シリング、子どもは 10 シリング 6 ペンスであったことを鑑みると、中流階級女性にとっては、妥当な値段であったことがうかがえる。バザー会場もなるべくロンドンのウェスト・エンドにするなどロンドンに買い物を楽しみにやってくる中流階級女性たちをターゲットにしたものであった。

2. 装飾：シンボルカラーの宣伝

まず、WFL が行ったバザーのプロパガンダは、組織のアイデンティティを確立することであった。色と組織を結びつけることに特に長けていたのは、WSPU である。1908 年に WSPU が紫、白、緑の三色を組織の色として宣伝始めると、WFL もいち早くその戦略を取り入れた。WSPU のシンボルカラーの宣伝は大変効果があったようで、1920 年代に WSPU の幹事のひとり、労働者階級出身のアニー・ケニー（1879-1953）が自伝を出版した際にも表紙に

この三色を採用するほど¹⁶、イギリス社会にこの三色の意味は広まっていた。

WFLは、まず色の選定から始めた。当初、候補として挙げられたのは、黄、白、黒であり、地方支部などにも意見を聞くという民主的な決定により、緑、白、黄金がWFLの色となった¹⁷。

WSPU同様、WFLもあらゆる機会に色を宣伝した。デモ行進等でバナーを準備し、参加することもそうであるが、1908年12月の「クリスマス祭」のパンフレットにも緑、白、黄金の縦縞模様が使用するなど、三色を多様なデザインに取り入れ始めた。特に色にこだわったのが、1909年の4月15日にウェストミンスター地区にあるキャクストン・ホールで開かれた「緑、白、黄金祭」である。

この「緑、白、黄金祭」のオープニングには、冒頭で紹介したように、大女優エレン・テリーが登場し、『デイリー・クロニクル』紙には彼女の写真とともにこのバザーが紹介された。テリーは、「たくさんの金色の刺繍によって美しくされた薄緑色の流れるようなローブと淡い金色の長いクロークによって半分覆い隠された」15世紀の位の高い女性の衣装を身に付けた。「イングランドの女性が現代よりもさらに威厳があり力のある地位についていた」という「黄金時代」ととらえられた15世紀がこのバザーのテーマであった¹⁸。

この装飾プランを考えたのは、大女優エレン・テリーと建築家エドワード・ウィリアム・ゴドウィン(1883-1886)の間に生まれたイーディス・クレイグ(1869-1947)である。クレイグは、1907年に「世界で唯一のレディ舞台主任」とある女性雑誌上で紹介されたが、それだけでなく舞台衣装などのデザインなども手掛けていた多才な女性であった¹⁹。女優参政権同盟(以下、AFL)とアーツ・アンド・クラフツ運動に興味のあった人々が集まったサフリッジ・アトリエ(1909)のメンバーでもあった。彼女は前年度に行われた「クリスマス祭」の会場装飾も手がけている²⁰。

衣装だけでなく、ホールの装飾も緑、白、黄金で統一されていた。『タイムズ』紙は、「ホールは、同盟の色によって趣味深く色付けされており、天井からは、ホロウェイ監獄に投獄されているメンバーの57の旗がつるされていた」と記した²¹。それだけでなく、「水仙のパラダイス」と描写されるほど、花があふれ、花もテーマの色にあった水仙が用意されていた²²。57の旗は、騎士の旗のようにも見え、中世の雰囲気醸し出していた。

15世紀という過去を理想とするところなどには、アーツ・アンド・クラブ

ツ運動の影響がみられる。この「緑、白、黄金祭」もそうであるが、バザーでは、しばしば歴史的な女性がモチーフとされた。アーツ・アンド・クラフツ運動は、モダン・デザインの父といわれるウィリアム・モリス (1834 - 1896) やジョン・ラスキン (1819-1900) の影響を受け、工芸が純粋芸術に劣らないということを訴え、工芸が生活と密着していた中世にその理想を求めた。上述したように、WFL によると、15 世紀は「イングランドの女性が現代よりもさらに威厳があり、力のある地位についていた」という時代である²³。しかし一方で、中世は、騎士道精神によって、女性は男性によって守られるべきというある種の役割が期待されていた時代でもあった。中世という時代を舞台設定として使用することで、WFL は、地位のある女性を示しつつも、騎士道精神によって男性に守られる女性らしい女性のイメージをも同時に提示することが可能となっていた。単に組織の色によって女性参政権組織としてのアイデンティティを示すだけでなく、過去をテーマとすることで、現実とはかけ離れた空間を演出し、花でさらに美しさと女らしさが付与されていた。

3. プロパガンダとしての商品

会場装飾だけでなく、緑、白、そして黄金という組織の色は商品にも使用されていた。クリスマス祭では、WFL のシンボルカラーのスカーフ、ピン、伸縮性のある服地のジャージなどが「^{カラーズ}色彩を購入しよう！色彩を身につけよう！色彩を知らしめよう！」という合言葉とともに販売された²⁴。また、「緑、白、黄金祭」では「一般の書籍売店」とは別に「サフリッジ書籍売店」が設けられ、「クリスマス祭」のパンフレット売店では、女性参政権運動の強力な支持者である作家イブラエル・ザングウィル (1864-1926) による小冊子や WFL の指導者たちの顔写真付きの 1910 年用カレンダーなども販売された²⁵。

そのようなあからさまなプロパガンダ商品だけでなく、サフラジストの女性らしさを示すために売られる商品もあった。WFL のメンバーであるマーガレット・ウィン・ネヴィンソン (1858-1932) は、WFL のバザーの目的について、次のように述べている。

われわれのバザーは、ありきたりのバザー、単に資金をかせぐ試みではありません。もし彼女たちが口を使うことができるのであれば、彼女たちは指も使うことができ、ミネルヴァの技——料理、縫物、ドレ

スメーキング、刺繍、そして工^{ハンドイクラフト}芸品ギャラリー——に実に長けているように、バザーは、サフラジストたちが真に女性らしい女性であるということを世に示す実物教育であるのです²⁶。

この引用に「実物教育」とあるように、WFL はモノの展示や販売を通して、WFL のコントロールの下で、参政権活動家のイメージを人に働きかけようとした。

まず、女性らしさを示すために、1909年4月の「緑、白、黄金祭」では、WFL は各種コンテストを開催した。「料理に投票を」コンテストでは、サフラジェットによって準備されたケーキ、ジャム、パンなどを販売し、それだけでなく、ベジタリアン料理のコンテストでは、6ペンスでベジタリアン料理を購入し投票することができた²⁷。その他に、アメリカ仕立てのブラウス、シャツブラウス、飾りのついたブラウス、子どものフロック、赤ちゃんのフロック、手刺繍による子どものボンネットといったコンテストの優勝者には、それぞれ1ギニーの賞金が、WFLの色に刺繍されたクッション・カバー、手刺繍が施されたテーブル・センター、白いアフタヌーンティークロスには半ギニーの賞金が準備された²⁸。この賞金は、エレン・テリーなどのパトロンから提供され、優勝者の作品ももちろん販売された。このコンテストの目的は、女性らしくないとされるWFLのメンバーたちも、こうした女性ならではのたしなみに長けていることを示そうとすることであった。

人形やテディ・ベアなどを販売する子ども用のおもちゃの売店、洗いやすい子ども服を販売する売店など子どもの面倒をみる母という役割を担った女性たちを視野にいたした売店を用意し²⁹、「クリスマス祭」では、クリスマス・ツリーのところで子どもたちに向けたお話が企画され、子どもたちには妖精の女王とのお付きからクリスマス・プレゼントの配布があった³⁰。さらに、コンテストで優勝した商品なども販売されたブラウスの売店では、「最新のパリの型から応用された特別な品々」と流行にも敏感に対応し、「家庭用リネンとテーブルリネン」など主婦のニーズに対応した商品も用意されていた。家庭に必要な商品の購入を任される家庭の主婦、そして子どもの面倒をみる母という役割を担った女性像を提示している。

加えて、女性たちの購買欲を掻き立てる魅力的な品として、ウェスト・エンドに店を構える有名店の品々も用意された。たとえば、「緑、白、黄金祭」

の陶器と磁器を販売する売店では、ウースター、ドルトン、ウェッジウッドなどの磁器が並べられていた³¹。

WFL の色に彩られたあからさまなプロパガンダのための商品だけでなく、このように百貨店などで売られる商品そのものも、WFL のバザーにおいては女性参政権活動家の女性らしさを訴えるプロパガンダの商品となった。

4. プロパガンダとしての演目

バザーでは、モノを販売するだけでなく、必ず演劇、音楽、ダンスなどの娯楽が提供された。娯楽を提供することによって、バザーにより多くの人を集める目的もあったが、資金集めという目的もあった。観劇などには、入場料とは別にさらに別料金をとったのである。

こうした演目には、プロパガンダがあからさまな演目と参政権運動に興味のない女性も楽しむことができる演目のふたつがあった。たとえば、WFL が始めて本格的に手がけた「グレイト・サフリッジ・バザー」で上演されたエリザベス・ベスル劇団によるシェイクスピアの『真夏の夜の夢』は、誰でも楽しむことができる演目である。年次報告書は、「これはとても楽しかったが、支出を補うのがやっとならであった」と記しており、劇団への支払いが入場料での収入で賄うことが難しかったことをうかがわせる。誰でも楽しめるクリスマス・パーティも企画され、20 ポンドを集め、「大成功」であった。一方で、明確に「プロパガンダを目的」とした『おばあちゃんの決心』という芝居が、会期中に 15 回も上演された³²。

「緑、白、黄金祭」の主要な演目は、シシリー・ハミルトン (1872-1952) とクリストファ・セントジョン (1871-1960) による『どのように選挙権が勝ち取られたか』であった。『どのように選挙権が勝ち取られたか』の主人公、中流階級の官吏ホラス・コールは、女性は家庭において夫に養ってもらわなければならないと考えている男性である。ある時、女性参政権組織が仕事を持っている女性たちにその仕事をやめ、一番近い親族の男性に養ってもらおうよう呼び掛けた。女性が、男性と同じく、仕事をして、財産があるにも関わらず、選挙権がないことに対する抗議である。まず、ホラスの家では、メイドが仕事を辞め、次にホラスの親族である女性たちが次から次へ家に押し掛け、彼に養ってもらおうとする。ホラスは、彼の給料で全員を養うことは不可能であると気づき、急に女性参政権運動に賛成へと鞍替えするというコメディで

ある³³。『デイリー・ミラー』紙は、「緑、白、黄金祭」で上演された『どのように選挙権が勝ちとられたか』の写真を掲載したが、ここでは、その楽しさが少し垣間見える【図1】³⁴。



図1 「どのように選挙権が勝ちとられたか」、「緑、白、黄金祭」にて。
1909年。(Daily Mirror, 15 April 1909, p.11.)

この演目は、AFLの芝居のなかで、最も演じられた回数が多い演目だった。その理由は、おそらく、戦闘的なサフラジェットも目立っては登場せず、この芝居に託されたプロパガンダが、巧妙な笑いによって希釈されていたからであろう。

「緑、白、黄金祭」では、13番の部屋は、AFLにまかされており、AFLは、15日には、アメリカ生まれのソプラノ歌手エスター・パリサー(1872年生まれ)、16日にはミュージック・ホール歌手マリー・ロイド(1870-1922)、17日には、女優イーヴァ・ムーア(1870-1955)という有名人たちを呼び物とした。同時に18番の部屋でも、初日は大女優エレン・テリーが呼び物となっていた。この部屋では、17日、18日には、『どのように選挙権が得られたか』にあわせて、柔術の演武と活人画『歴史における勇敢な女性たち』も上演された³⁵。

柔術は、女性参政権活動家と結び付けられることが多く、この柔術の演武は、観客にすぐに女性参政権活動家の姿を想起させたであろう。風刺雑誌『パ

ンチ』でも、警官たちを柔術で投げ捨てる女性参政権活動家のイラストが掲載されており、柔術と女性参政権活動家のイメージが人々の意識の中で結びついていたことがわかる³⁶。

活人画『歴史における勇敢な女性たち』は AFL が様々な参政権組織に提供した演目のなかでも特に人気があり、クレイグが衣装と演出を担当した『偉大な女性たちの仮装劇』を少々アレンジしたものであった。AFL と女性著述家参政権協会による 1909 年 11 月にスカラ座の公演で初めて上演され、人気を博し、WSPU や WFL の支部が地方での公演でしばしば上演した。フローレンス・ナイティンゲールやジェーン・オースティンなど世界各国からの歴史的な女性が登場する。活人画の最大の特徴は、数多くの女優たちが登場し、仮装するため、通常の芝居と比較すると華やかな演目になるということである。WFL のシェフィールド支部が 1910 年 10 月にこの芝居の公演をした際、パンフレットには「仮装劇は『サフラジスト』の仮装劇といわれておりますが、選挙権については言及いたしません。そして、決して議論的になるようなものではありません」と記載されていた³⁷。このように、この演目では、プロパガンダ色はその華やかさの前に薄められていた。

「クリスマス祭」では、シシリー・ハミルトンとクリストファー・セントジョンによる『ポットとヤカン』、ベシー・ハットンによる『日の出前』、『どのように選挙権が勝ち取られたか』、バーナード・ショウ (1856-1950) による『プレス・カッティングス』が上演された。『ポットとヤカン』、『日の出前』、『プレス・カッティングス』は、かなりプロパガンダ色の強い演目である。『ポットとヤカン』は、四人の反女性参政権運動家が賛成へと転向する話であり、『日の出前』は、ジョン・スチュアート・シル (1806-1873) が女性参政権法案を議会に提出した 1867 年を設定し、結婚やキャリアにおける女性の選択のなさにふれている。

ショウの『プレス・カッティングス』はこの時初めて上演された。ショウの『プレス・カッティングス』には、ミッチナー元帥とバルスキス首相という登場人物がいるが、彼らは、時の首相アスキス (1852-1928) と第一次世界大戦時に陸軍大臣をつとめたキッチナー元帥 (1850-1916) をパロディ化したものである。この芝居は、興味深い出だしから始まる。陸軍省の入り口のドアに自らを括り付けた「サフラジート」がミッチナーの執務室へ連れてこられる³⁸。連れてこられた女性は、実は首相バルスキスであった。彼は誰にも

気が付かれずに首相官邸から陸軍省に入るために一芝居打ったのである。そこに、「力強い声と肉体的に力強そうな40あまりの男性的な女性」であるミス・バンガーと「美しく、ロマンティック」で「30歳を超えている」レディ・コリンジア・ファンショウがやってくる。彼女たちは、実は、反女性参政権同盟のものたちである³⁹。

バーナード・ショウは、この芝居の中で通常世間がサフラジェットに持っているイメージを反女性参政権活動家に適用し、サフラジェットの論理で反女性参政権活動家のミス・バンガーとレディ・コリンジアの姿を描いた。

ミス・バンガー：われわれ反女性参政権活動家たちは、戦うということ率直に伝えにきました。

ミッチナー：[女性たちに礼儀正しく]ミス・バンガー、どうぞ男性たちにお任せください。

レディ・コリンジア：われわれはもはや男性を信じることはできないのです。

ミス・バンガー：彼らには、サフラジェットのような女性と戦うために必要な強さ、勇気、または決断力がないことは明らかです。

ミス・バンガーはさらに続け、

ミス・バンガー：女性に必要なものは軍隊に入る権利なのです。選挙権を持った男性の連隊ではなく、サーベルを持ち立派な馬に乗った女性の連隊を私に任せてください。どちらがより先に倒れるか楽しみです。いいえ：我々は、警察裁判所でただ代理人たちに話しかけ、反対尋問をし、羊のように監獄へ行き、自分たちを犠牲にするだけの優しくかわいらしい人々にはもう我慢がならないのです。この問題は、ビスマルク、ある理由からは私は変装した女性であると信じているのですが、彼が述べているように、血と武器で解決されねばならないのです⁴⁰。

ミス・バンガーによると、男性はあまりにも弱い。ショウは、世間がサフラジェットに対して抱いているイメージを登場人物である反参政権活動家の

ミセス・バンガーに適用して描いている。ショウの芝居は、女性によって書かれた参政権運動擁護の芝居よりも内容が複雑である。演技手にとっては、やりがいのある芝居であっただろう。

これらの芝居の公演を引き受けたのは、AFLであった。AFLは、年に約一回のロンドンの劇場公演では、プロパガンダの強い一幕芝居と弱い活人画のような演目を組み合わせ、プロパガンダが強くなりすぎないように調整をしていた。しかし、WFLのバザーでは、比較的プロパガンダが強くなる演目を選択しているように見受けられる。この演目が行われている部屋に入るためには、別料金を支払うため、観客には女性参政権運動を擁護する作品を見せられることをおそらく認識していただろう。そのため、このバザーでは、AFLは万人には受け入れられない芝居をも上演することができたと考えられる。

5. 展示

WFLのバザーでは、展示でも戦闘的な女性参政権活動家をイメージさせるものと、女性らしい女性をイメージさせる展示のふたつがうまく組み合わせられていた。

WFLの展示で特に興味を引き付けたのは、ホロウェイ監獄の監房のひとつを再現し、中にサフラジェットの囚人を置いたものである。この展示を行ったのは、WFLが初めてであった。その後、WSPUのバザーにも取り入れられたこの展示は、1908年の「グレイト・サフリッジ・バザー」ではじめて展示され、下層中流階級女性向けの女性雑誌『家庭に関するおしゃべり』は、「ミス・モカッタ自身が、囚人服に身を包み、この今までにない小部屋に入っている。部屋の角には、毎朝、揺らされ、巻かれるマットレスが見られ、その上には、丁寧に畳まれた毛布とシーツが置かれている。床の上のヤカンやポットは、きれいに洗われ、そして、監房は、磨き抜かれた一全て朝食前に。」と説明を加えた⁴¹。政治的な運動のために、女性が監獄に入るという展示手段は、一般の下層中流階級女性にとっても興味のある事柄に成り得たことがうかがえる。この展示は、人気を博したのか、さらに「緑、白、黄金祭」でも再度登場し、この部屋への入場費用は6ペンスであった。

「クリスマス祭」ではポスター・コンペティションも行われた。その審査員をつとめたのは、アーツ・アンド・クラフツ展覧会協会の会長ウォルター・

クレイン(1845-1915)と有名な女性画家ミセス・ジョップリング・ロウ(1843-1933)であった⁴²。ポスターは、おそらく女性参政権関係のポスターのコンペティションであったと考えられる。社会主義をイラストで表現したクレインは⁴³、女性参政権運動を宣伝するポスターの審査にふさわしい人物であっただろう。こうして集められたポスターも女性参政権の直接的なプロパガンダとなる。

一方で、女性参政権運動とは直接的な関係は見られない展示も行われた。工芸品の展示である。「グレイト・サフリッジ・バザー」では、中国と日本のアンティークが展示された⁴⁴。中流階級女性用の雑誌『クィーン』に工芸品や美術品などの展覧会の批評記事が掲載されていたことをみると、工芸品の鑑賞は中流階級女性の娯楽のひとつでもあり、WFLは巧みに中流階級女性の興味を引き付けている。

しかし、それだけではなく、工芸品には別の意味もあった。女性のたしなみとしての手仕事を連想させるものでもあったのである。この頃、『針』(1903-1910)、『淑女の小間物雑誌』(1907)、『家庭の工芸品』(1907-1917)といった名称のアマチュアの女性向けの雑誌が販売されていたことからわかるように、主婦などのアマチュアの女性たちこそがファッションと消費の面からアーツ・アンド・クラフツ運動を支えていた⁴⁵。「緑、白、黄金祭」では、1番と8番の部屋には、手工芸セクションとされ、エナメル、ジュエリー、織物、刺繍、皮製品が並んだ。英仏博覧会で金賞をとったような人物の作品が用意され、購買欲をそそった。ここで展示されたのは、すべて女性の手による作品である。それらは、女性らしさを強調するプロパガンダとなった。

おわりに

WFLが初めてバザーを行った1908年は、女性参政権運動が盛り上がり始めた時期である。1908年2月には、自由党議員ヘンリー・ヨーク・スタンジャーによって提出された女性参政権法案が第二読会を通過した。首相アスキスの反対により法にはならなかったが、女性参政権活動家に期待を持たせるには十分であった。これをうけて、1908年には、NUWSSが6月13日にロンドンでのデモ行進を行い、翌週にはWSPUが「女性日曜」行進を企画するなど、大規模なプロパガンダ活動が展開された。デモ行進は、不特定多数に向けたプロパガンダであったが、バザーは、消費者である女性を特定のター

ゲットとしたプロパガンダの場となった。

中流階級女性の娯楽である消費活動を利用することによって、WFL は法案が実現した場合、参政権を得る可能性が最も高い中流階級女性たちに向けて的確なプロパガンダを打つことができた。マーガレット・ウィン・ネヴィンソンの言葉にもあったように、「バザーは、サフラジストたちが真に女性らしい女性であるということを世に示す実物教育」であった⁴⁶。しかし、そこでは女性らしい女性ばかりが示されたのではなく、参政権のために戦う女性とともに並列され、どちらも女性の側面をあらわすものとされた。

記録にある最後の WFL のバザーは、1912 年 11 月の「国際サフリッジ祭」である。1912 年以後、WSPU によるミリタンスーはさらに激化した。そのような中、おそらく、バザーというプロパガンダの場において、女性らしい女性を示すだけではますます過激化する戦う女性のイメージを緩和することはできなくなっていた。第一次世界大戦に突入すると、さらに、バザーといった人々の贅沢を促すような娯乐的な催しは、女性参政権運動にとって肯定的なプロパガンダとはならなくなったのである。

注

¹ Claire Louise Eustance, "'Daring to Be Free': The Evolution of Women's Political Identities in the Women's Freedom League 1907-1930," Ph. D thesis, University of York, (1993); Claire Louise Eustance, "Meanings of Militancy: The Ideas and Practice of Political Resistance in the Women's Freedom League, 1907-1913," *The Women's Suffrage Movement: New Feminist Perspectives*, eds. Maroula Joannou and June Purvis (Manchester: Manchester U. P., 1998) pp.51-64.

² John Mercer, "Buying Votes: Purchasable Propaganda in the Twentieth-Century Women's Suffrage Movement," Ph D. Thesis, University of Portsmouth, (2005)を参照。

³ "The Suffragette Bazaar at the Caxton Hall", *The Daily Chronicle*, 16 April 1909.

⁴ *Oxford English Dictionary*. Web. 2 Feb 2012.

⁵ John Mercer, "Buying Votes: Purchasable Propaganda in the Twentieth-Century Women's Suffrage Movement," Ph D. Thesis, University of Portsmouth, (2005), p.142.

-
- ⁶ WSPU のバザーについては、拙稿, “Buying and Selling Politics: Bazaars in the Edwardian Women’s Suffrage Movement”, *Conference Proceedings of the History of Consumer Culture 2012 Conference*, pp.89-94 を参照。
- ⁷ Women’s Freedom League, *Report of the Women’s Freedom League for the Year 1908*, (1909), p.13
- ⁸ Deborah Sugg Ryan, "Spectacle, the Public, and the Crowd: Exhibitions and Pageants in 1908," *The Edwardian Sense: Art, Design, and Performance in Britain, 1901-1910*, eds. Morna O'Neill and Michael Hatt (New Haven & London: Yale University Press, 2010), p.46.
- ⁹ Mercer, "Buying Votes: Purchasable Propaganda in the Twentieth-Century Women's Suffrage Movement", p.143.
- ¹⁰ *The Common Cause*, 3 Oct 1912, p.456. 「国際サフリッジ祭」についてはプログラムなどの史料が残っておらず、詳しいことはわかっていない。
- ¹¹ 拙稿、「政治を演じる：イギリス女性参政権運動における女優参政権同盟の役割」、『麗澤大学紀要』第91巻、2010年、71-88頁。
- ¹² Mercer, "Buying Votes : Purchasable Propaganda in the Twentieth-Century Women's Suffrage Movement", p.126.
- ¹³ Women’s Freedom League, *Report of the Women’s Freedom League for the Year 1909 and of the Fifth Annual Conference*, (1910), p.18.
- ¹⁴ Women’s Freedom League, *Report of the Women’s Freedom League for the Year 1908 and of the Fourth Annual Conference*, (1909), p.22.
- ¹⁵ Women’s Freedom League, *Report of the Women’s Freedom League for the Year 1912 and of the Eighth Annual Conference*, (1913), p.9.
- ¹⁶ Annie Kenney, *Memories of a Militant* (London: E. Arnold, 1924).
- ¹⁷ Women’s Freedom League, *Report of the Women’s Freedom League for the Year 1908 and of the Fourth Annual Conference*, (1909), p.7.
- ¹⁸ “The Suffragette Bazaar at the Caxton Hall”, *The Daily Chronicle*, 16 April 1909.
- ¹⁹ *The Penny Illustrated Paper and Illustrated Times*, 26 Jan 1907, p.53.
- ²⁰ *Report of the Women’s Freedom League for the Year 1909*, (1910), p.18.
- ²¹ “Woman Suffrage”, *The Times*, 16 April 1909.
- ²² “The Suffragette Bazaar at the Caxton Hall”, *The Daily Chronicle*, 16 April 1909.
- ²³ *Ibid.*

- ²⁴ *Programme for the Yule-tide Festival*, 1909, p.23.
- ²⁵ *Ibid.*
- ²⁶ M. W. Nevinson, "The Suffragists' Bazaar", *Women's Franchise*, 20 Mar 1908, p.456.
- ²⁷ Women's Freedom League, *Programme of the Green, White, and Gold Fair*, (1909), pp.7-9 in Maude Arncliffe Sennett Collection, The British Library.
- ²⁸ Leaflet "Votes for Women Prize Competition in Connection with the Green, White and Gold Fair", (1909) in Mary Gawthorpe Collection, The Tamimeut Library at New York University, Series 3, Box 6, Folder 10.
- ²⁹ *Programme of the Green, White and Gold Festival*, pp.8-9.
- ³⁰ *Programme of Yule-tide Festival*, p.7.
- ³¹ *Programme of the Green, White, and Gold Fair*, p.9.
- ³² Women's Freedom League, *Report for the Year 1908 and of the Fourth Annual Conference*, (1909) p.13. 『おばあちゃんの決心』という芝居の内容については記録がなく、その内容はわかっていない。
- ³³ Cicely Hamilton and Christopher St. John, "How the Vote Was Won," *How the Vote Was Won and Other Suffragette Plays*, eds. Dale Spender and Carole Hayman (London: A Methuen Theatrefile, 1985).
- ³⁴ *Daily Mirror*, 15 April 1909, p.11.
- ³⁵ Women's Freedom League, *Programme of the Green, White, and Gold Fair*, (1909), pp.14-15.
- ³⁶ "The Suffragette That Knew Jiu-Jitsu – The Arrest", *Punch*, 6 July 1910, p.9.
- ³⁷ "A Pageant of Great Women Programme, Sheffield Branch, Women's Freedom League", 15 Oct 1909, Document ID: EC-PION, D185/6 in Edith Craig and Ellen Terry Archive, LOAN MS. 125/07/94, Box 13, 8003F, The British Library.
- ³⁸ 戦闘的行為を行う女性参政権活動家は、サフラジェットと呼ばれた。通常、サフラジェットのつづりは「Suffragette」であるが、『プレス・カッティングス』では、「Suffragete」となっている。
- ³⁹ Bernard Shaw, *Press Cuttings: A Topical Sketch Compiled from the Editorial and Correspondence Columns of the Daily Papers: As Performed by the Civic and Dramatic Guild at the Royal Court Theatre, London, on the 9th July 1909* (Bibliolife, 1909) 23.

⁴⁰ *Ibid.*

⁴¹ *Home Chat*, 9 May 1908, p.378.

⁴² Women's Freedom League, *Report of the Women's Freedom League for the Year 1909 and of the Fifth Annual Conference*, (1910), p.18.

⁴³ 菅靖子「社会はデザインで変わるのかーウォルター・クレイン再考」、『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』（向井秀忠、近藤存志編、音羽書房鶴見書店、2011年、p.237.

⁴⁴ A “Suffragist Bazaar”, *The Times*, 2 April 1908, p.14

⁴⁵ S. K. Tillyard, *The Impact of Modernism 1900-1920*, (London: Routledge, 1988), p.6

⁴⁶ M. W. Nevinson, “The Suffragists’ Bazaar”, *Women's Franchise*, 20 Mar 1908, p.456.

本稿は、「重点研究助成(麗澤大学、2011)」による研究成果の一部である。